

新
刊
紹
介

For some in ancient books
delight; Others prefer what mod-
erns write: Now I should be
extremely loth. Not to be thought
expert in both.

二村宏江・秋篠憲一・海老久人編

『中世英文学への巡礼の道』

——齋藤勇教授還歴記念論文集——

(南雲堂・発行一九九三年三月
A5判・四九九頁 一五〇〇〇円)

同志社大学文学部の齋藤勇先生といえ
ば、中世英文学研究において海内無双の大
家である。先生がラングランドの『農夫ビ
アズ』の研究で同志社大学より大学博士の
学位を受けられたのは一九六四年のこと
であった。そして学会活動や数多くの論文を
通して、また『中世のイギリス文学』『聖
書との接点を求めて——』(一九七八)、『カ
ンタベリー物語——中世の滑稽・卑俗・悔悛』

(一九八四)、『イギリス中世文学における聖
と俗』(一九九〇)などの渾り知れないほど
貴重な労作を通して、先生は日本の中世英
文学研究の発展と充実に多大の貢献をして
こられたわけである。

鳥鬼匆匆というべきか、月日の経つのは
早いもので、齋藤先生は一九八九年三月二
五日還歴を迎えられた。本書はそれを記念
して出版された論文集である。日本と英国
の研究者三〇名が、チヨースターの『カンタ
ベリー物語』でロンドン南郊のサザークの陣
羽織亭に集まった三〇人の巡礼者よろし
く、読者を中世英文学への巡礼の旅に誘っ
てくれる。収められている論文は、神韻縹
渺と評してよい好論文である。本書の編集
方針の中心にチヨースターの『カンタベリー物
語』の構図が据えられていたかどうかは知
らないが、チヨースターが『カンタベリー物語』
でさまざまな人物を描いてみせたのと同
様、『中世英文学への巡礼の道』の研究対象
は多岐にわたっている。カンタベリー物語、
『トロイルスとクリセイダ』、『百鳥の集い』
といったチヨースターの主要作品や『農夫ビ
アズ』、『ガウェイン卿』、『アーサー王の死』、

『ハヴェロック』のような馴染み深い中世文
学だけをその研究対象とするのではなく、
他に中世の礼節の書、宗教詩、ロマンス、
劇などを扱った論文もあれば、また『ペー
オウルフ』の翻訳論、古英語の統語論、チ
ヨースターの雛菊のイコノロジーを問題にし
た論文もみられ、その内容は実に多彩で豊
かである。僅かな紙面では個々の論文の内
容を紹介することは不可能であるが、総じ
て、作品の一言一句に真摯にこだわり、片
言隻語をも疎かにしてなるものかという姿
勢が随所にみられる好論文集である。

本書の巻頭論文でD・ブルワ氏は面白
いことを指摘している。わたしなりに簡単
に要約してしまえば次のようになるであろ
うか。中世の、例えば、ランスロットや聖
杯伝説にまつわる物語は、シェイクスピア
の劇と同じように、すでに読者(聴衆)に
馴染み深い物語の焼き直しであり、その基
になった物語と共通の「核」を持つ。基本
的に同じ「核」を持つ物語が、表面的に形
を変えながらも、幾度となく焼き直される
のは、その物語には繰り返し解決を迫る重
要な問題が含まれているからにほかならな

いと。そしてそういう問題には時代を越えて、文化を越えて訴える力があるからこそ、わたしたちも魅了されるのである。本書は真にそう願う人に資するところ大である。

山口賀史（大学文学部助教）

井上智義・広瀬雄彦・清水寛之共著

『教育学』

— 認知心理学からのアプローチ —

（サイテック・発行一九九三年三月）
（B6判・一四六頁 二、八〇〇円）

教育学はコンピュータや視聴覚機器の発達に支えられてきたが、今、曲り角にきているともいわれる。ハードウェア先行型で進められてきた研究が、教育ソフトの開発や各種の機器利用の技術開発だけでは学問的体系を構築することができないからである。

本書は、教育学の理論的基礎を認知心理学に求め、体系化は今後待つとしても、その第一歩を踏み出した労作として評価されるものである。テキスト及至入門書の形をとっているが、著者たちのオリジナルな

考えが素直に語られており、これまでの教育学関係の類書にありがちな無味乾燥な内容とはひと味違ったものになっている。この特色から、今後の研究によって肉づけがなされるならば、認知心理学に基づく理論化が進み、教育学の新しい姿をみることができるではなからうか。

教育活動の一つの側面は情報の相方向的な流れとして特徴づけられるが、本書の2、3、4章はその情報に関する基礎的理解を図ろうとしている。2章は「情報の伝達と理解」について、情報理論やコンピュータと人間における符号化の違いなどを通して解説している。3章は認知心理学の基礎を説明し、「人間の情報処理と学習・記憶」のメカニズムを説いている。4章は「社会の情報化と人間の暮らし」を具体的資料を挙げながら解説したものである。いずれも情報科学としての教育学を構築するためには欠かせない基礎的内容であり、入門者にはここから理解を深めてほしいものである。

他方、今日の学校で求められる主な教育工学的知識としては、個別教育とメディア

教育における機器の利用に関するものである。本書の5、6章はこれらの要望を視野に入れつつ、単に技術の解説に流れてしまふことのないように論を展開している。

5章は「個別教育と情報機器の活用」、6章は「マルチメディアと教育」をそれぞれ扱っている。コンピュータによって制御されず、主体的に学ぶことのできるツール学習や、障害児教育での活用例など興味深い内容が紹介されており、また二重符号化仮説や大脳半球機能差に関する理論をとり入れたメディア教育論など意欲的な論がみられる。

著者らは認知心理学における気鋭の研究者であり、はしがきや1章に述べられている立場は彼ら自身の研究歴に基づくものであり、よく理解できるところである。本書が単に教育実践に必要な知識を提供するだけでなく、その基礎となる認知心理学の発展にも大いに寄与するのではないかと潜在に期待している。

北尾倫彦（京都女子大学文学部教授）

門田誠一著

『海で結ばれた人々』

(同朋舎・発行一九九三年十月
B6判・二四四頁 二、四二七円)

幼い頃、万華鏡を見るのがとても好きだった。日にかざしながら覗き込むと、見るたびに違った鮮やかな紋様が浮かび上がり、心踊る気持ちがある。そんなことをふと思い出させてくれる一冊の歴史書に出会った。

万華鏡が著者の手で回されると、光が差し込み、共鳴し、物言わぬ考古資料のそれが結びつき、今まで知り得なかった姿を現す。本書は、今最も活躍中の若き考古学研究者の目という一枚のフィルターを通して、東アジアの古代の人々の生きざまと海を越えての結びつきを色鮮やかに映し出している。

全体は「I、海を越えた祖先たちの出会い」、「II、海流をはさんだ人々のくらし」、「III、古墳に葬られた同時代人」からなる。どこから読みはじめたとしても、古代の人々の生活の舞台に自然に入り込むことが出来る。古代の貨幣といわれる鉄鋌、かつ

て日本にしか存在しないと考えられていた前方後円墳、隅三角持ち送りとよばれる横穴式石室の特殊な構築技法、山城（砦のこ）と、十二支、武器、蛸壺、橋牛、馬、毒棺、骨等々、最新の多彩な考古資料をもとに、古代東アジアの人々の交流の軌跡、習俗の伝播、さらにはその社会的背景が次々と明らかにされている。

幅広い学問への興味から、つねに新しい視座が模索され、随所に注目すべき指摘がみられる。例えば武器と農工具の項では、北部九州への渡来第一世の墳墓の特定を試み、日本の古墳にみられる鉄製ミニチュア農工具の副葬の習俗は、大加耶や榮山江流域で盛行する習俗が人の移動に伴い朝鮮半島から伝えられたとする重要な見解を述べている。また遊牧騎馬民族が好んで用いた角杯（角製の酒器）と古新羅で流行する牛殺しの盟誓の項では、誰もが見落していた動物学の成果が注目される。著者は牛の角が完全な状態でとれるのは牛が死んだ時だけであることを指摘し、角杯には牛を殺し、盟約を誓う儀式が象徴されていることを明らかにする。北陸地方でも焼かれた須恵器

製の角杯は、三国時代の新羅に直接の影響を受けた可能性が高いとされ、海をはさんで大陸と対面する北陸や山陰の独自性と重要性を再認識させる。

語り口は軽妙にして、鋭く堅実である。読者は機知に富んだ随筆を読むようにページをめくりはじめながらも、いつしか古代東アジア史研究の最前線に案内されていることに気づくだろう。ここで語られているのは、今まさに考古学界で問題とされている専門的な題材である。著者は、それぞれのテーマを海を隔てた東アジアに生きた人々の生活の次元に引き寄せて展開し、我々に東アジアのなかの日本を改めて認識させる。これはきわめて現代的なテーマであり、果敢な試みでもある。

高野陽子（校地学術調査委員会嘱託）

杉浦 宏編著

『デューイ研究の現在』

(株)日本教育研究センター発行（一九九三年十一月）
A5版・三五二頁 五、〇〇〇円

本書は、東京国際大学教授で、日本デューイ学会常任理事を勤められる、杉浦宏先

生の古希記念論文集として編纂された。執筆者は同志社大学、森章博教授、佐野安仁教授（発起人の一人を兼務）、同志社女子大学、加賀裕郎助教授を含めた、第一線の研究者十八人である。それぞれの執筆者が最も関心の深い研究テーマで、この今世紀を代表する思想家を多角的に論究し、これ以上は望むべくもないほどの、豪華な学（シユムボシヨシ）の饗宴を繰り広げている。

ジョン・デューイの名は、没後はや半世紀を迎えつつある今日のアメリカでも、むしろ再評価の機運の高まりの中にある。そうした隆盛は、南イリノイ大学編纂の、四十巻近いデューイ全集の完成や、R・ローティの独創的な解釈の登場や、これに触発された多くの研究書の刊行などによるものでもあるけれど、拠って立つべきグラント・セオリーの不在に悩む昨今の社会状況を考え合わせる時、そうしたある種の原点回帰は、やむにやまれぬ一つの趨勢ではないかとも考えられる。

こうした動向と相関して、本書にも、ロイティ、パトナム、ブルーム、フェニックス、フレイレ、ホルクハイマー、アドルノ、

ハーバース、フロムなど、現代の思想家とデューイを対峙させ、社会的な方向へ展開した論考が、若い世代に共通して見られる。つまり本書は、そうしたデューイ思想の発展的研究と、哲学、教育などに関する、従来の内在的なテーマをいっそう深化し、集大成した諸研究成果とが、いわば合わせ鏡をなしているところに、論文集ならではの特長が生かされている。

もつとも、論纂の常ではあるが、こうした多様性から読者が一貫したデューイ像を得るのは、必ずしも容易ではないことも否めない。杉浦先生の「わたしのデューイ観」（第一論文）は、この懸隔に架橋する好適の手引でもあるが、なお読者には、本書を通して自身のデューイ像を描くという課題が残されている。

日本デューイ学会は、すでに三七回の年大会を開き、三百余名の会員を擁している。私もその一名であるが、これほど真摯で率直な雰囲気の学会もまれであろうと、常に感じさせられる。それは、この民主主義の驍将を巡る会ならではのことであろうが、やはり、杉浦先生を初め、諸先生方の長年

のご尽力の賜物であろう。先の論文中的述定「デューイのたぐいまれな人間凝視の姿勢は、彼の慎みぶかいひかえめな人がらによって、はじめてなしうること」（二二頁）とは、まさに当の杉浦先生のお姿をこそ言い表すのにふさわしい。我々の敬愛してやまない先達の、さらなるご薫陶を心より祈念する。

立山善康（京都造形芸術大学専任講師）

小野 修編

『二〇世紀のイギリス作家の肖像』

（研究社出版・発行一九九三年一〇月）
B6判・二二二頁 二、五〇〇円

わたしたちは二一世紀の戸口のすぐ近くに立っただけで、残された時間はもう余りない。こう言うといささか脅迫めくが、時間という怪物に逆らわずに生きていくということに同意している限り、つまり、「正気」の側に生き、酒を喰らい（喰らわなくてもよいが）、日々愚痴をこぼし、「社会」のシステムの中で生活が続いている限り、途絶えることのない大いなる命の流れとは違つて本来は単なるフィクションに過ぎない時

計的な時間を絶対的価値として信奉している限り、わたしたちはある一回の日の出に特別な意味を付与することを躊躇わないし、二〇〇〇年という時間のひと区切りに人類の運命の転変を予感したりする。

そんな阿呆なという人も、大地や海との東の間の休息から、チクタクうるさい都市の時間の世界にいつも従順に戻って来るではないか。二〇世紀は人間にとって厄災であつた。時間というもつとも厄介な十字架をわたしたちに背負わせたばかりか、それまで味方だと信じていた意識や言語に裏切りを働かせる。わたしたちは言語にたてをつかれ、意識に責め苛まれることになった。この二人の恩知らずは二〇世紀においてかつてないまでに先鋭化し、わたしたちを苦しめ続けた。ひよつとしたら、と思う。こんな約束じゃなかったはずの二〇世紀は西欧近代とその西欧近代に同化する道を選択した日本のような国だけに訪れたのではないかと。

二〇世紀のイギリスの作家たち、例えば本書で取り上げられているコンラッド、ジョイス、ウルフ、ロレンス、フォースター、

エリオット、オーウェル、グリーンはそんなわたしたちにとってかけがえのない友人である。押本年眞、中村春次、山本妙、吉村宏一、内海俊祐、中井農、小野修、東篠晋の八人の執筆者たちは二〇世紀のイギリスに集まつた八人のまじめで、心の優しい、そして傷つきやすい作家の本質を捉え、これ以上は噛み砕けないというほどまでに分かりやすく、また明快に解説している。それはまるで雪に閉ざされた街で、ある夜ふと思い立つて旧友に長電話をしている光景に似ている。ボーダーレス、言語ゲーム、フェミニズム、生命の本質、同性愛、宗教と秩序、管理社会と未来の統治機構、人間の底無しの内面などといった二一世紀へと持ち越される課題を語り合ううちに、ブラインドの隙間から朝日が差し込んで来てしまう。各章の扉に付された作家たちの肖像が執筆者たちの肖像に段々とスーパーインポーズされていくような錯覚に襲われるのは、執筆者たちの長年の着実な研究と情熱の小さないたずらなのであろうか。

田口哲也（大学言語文化教育研究センター助教授）

沖田行司著

『日本近代教育の思想史研究』

（日本図書センター 一九九二年十一月）
A5判・二八〇頁 六、一八〇円

本書は二八〇頁に及ぶ本格的研究書である。読後感に依つて、その内容や特徴の一端を簡条的に列挙して紹介に代えたい。

本書は沖田氏の最初の単著書である。コングラチュレーション。文体はオーソドックスであり硬質であるが、叙述の感情はやはり若々しく意欲的である。概念の構築が論述の組成となっている。佐久間象山、横井小楠、長谷川昭道、西村茂樹、森有礼、新島襄、井上哲次郎、杉浦重剛の思想が論じられ、全四章に二人ずつを配し、世代的な思想史の構成をとる。対象の人物は一九世紀前半に生まれ維新の渦中に思想形成をした人々であり、彼らの思想の個性は道徳論にあつた。全篇をつらぬく主題は「伝統と欧化の相克」つまり自覚された日本と普遍としての西欧との思想的せめぎ合いである。対象の人物から自明のように著者の関心あるいはシンパシーは「伝統主義者」におかれているが、それは「伝統主義」こ

それが開化思想との間にダイナミックな思想的葛藤があるはずであると考えたからである。八名の思想的生涯を見渡している点での著者の努力は並々ならぬものがあるが、主題への執着が八名の思想形成に焦点を据えさせている。それゆえに本書は青年思想家の多感なドラマとして読むことができる。加えて教育という視座がその主題を一層浮き彫りにする。国民国家形成期における教育を担わんとした啓蒙思想家たちにとって伝統と欧化の相克は、まったく現実であり微妙な思念の問題としてあつたと考え、著者の着眼は納得できるものである。著者のねらいはまた、その思想的葛藤をもつて「国際化」が叫ばれている今日の思想状況を解析せんとしたところにあつた。

本書は個々の思想家の論としてよりも主題追求に面目がある。したがって全篇を通読する要がある。本書の主題は近代思想史研究においてつねに問題とされてきたもので、それだけに新しさを求めることはできないけれども、根本問題に取り組んだところに価値をもっている。章を追うごとに欧化の浸透がさかんとなり、それゆえに伝統

へのすり寄りが増してくる様が明瞭になってくる。主題との関連でとくに印象に残ったのは長谷川、西村、杉浦であつた。

個々の論としておもしろかつたのは第三章の森と新島である。森の思想を「国家啓蒙主義」と規定し、それが生涯をつらぬいているとの解釈は成程と思われた。また新島には他の倍の紙数を費やしていることから著者の思いをうかがうことができる。個人主義者という側面に力点をおいた新島像はずいぶんと目新しく思われた。

露口卓也（大学文学部助教授）

安岡重明・藤田貞一郎・石川健次郎編著
『近代商人の経営遺産』

——その再評価——

（同文館・発行一九九二年一月
A5判・二五九頁、四、〇〇〇円）

本書は、一九八九年七月開催の社会経済史学会近畿部会夏季シンポジウム報告に基づいて編集されたもので、評者なりに整理すると、一経済史、二経営史、三企業者史、の三視角から分析されている。

第一章（安岡重明）では、三都商人との比較、「商業軽視史観」の原因、経営遺産の継承が想定できる具体例を指摘した後、同氏の提起する諸テーマが示され、これらに応じる形で、まず第二章（藤田貞一郎）が配置される。第一の視角に分類できる研究で、大量現象としての近江商人輩出の原因を究明する。近世前から要衝であつたこと、近世初頭の高い農業生産性、湖東三郡の就業機会の稀少性、非領国的所領配置を主要要因として検証し、さらに信長政権下に首都安土へ集められた人々が供給源の一つであるという仮説を提示した。第三章（上村雅洋）は、第二の視角のうち、雇用制度に関するもので、地元出身者の雇用、在所登り制度、退職状況、別家制度、給与を取り上げ、経営合理性という観点から近江商人の特性と一般性を論じ、これらは社会経済の移行にもなって変化したばかりでなく、経営規模にも影響されることを示唆した。第四章（石川健次郎）の論旨は明快で、中井家、丁吟、伊藤忠の三者を、それぞれ明治以降衰退、現状維持、発展の具体事例として掲げ、それらの違いを、近世の経営・

会計制度を活用したかどうかに求めたが、第三のアプローチの必要性も強調した。第五章（瀬岡誠）は第三の企業者史的研究で、個性の「経済人」を前提とする経済学的方法と異なり、個性的な人間による革新を経済発展・成長の主要要因とし、そのような革新者を生み出した社会学・心理学的背景を究明する方法と理解する。本論文では、企業者の生成に重要な諸概念のうち、広域志向性に焦点をあて、八商・東亜同文書院などを通して、近世近江商人の中に根付く広域志向性が、多数の近代江州系企業家に植え付けられたことを検証した。第六章（末永國紀）は第一と第二の視角に関わる。湖東三郡出身で、現存する一二の繊維商社を取り上げ、近世の経営・雇用制度が、明治以降、松方デフレを始めとする内外の変革に直面して、どのように変化していき、近代商業資本へと転化していったかが検証された。以上の五論文の後に、総合商社史研究の立場からのコメント（桂芳男）と、「討論」が続く。最後の「総括」は安岡氏が行い、各論文の要約、論文間の相互関連性、経営史・商業史における各論文の位置付け、

そして残された課題をきわめて鋭く指摘した。

以上の多角的アプローチに加え、多数の個別研究を踏まえた上で、鳥瞰的に比較分析を行うことにより、「特殊性とみられていた現象を一般性との関連でとらえ直す」のに見事に成功し、多大の研究遺産を社会経済史・経営史学会に残すこととなった。

植村正治（流通科学大学教授）

佐野安仁・吉田謙二編

『コールバーグ理論の基底』

（世界思想社・発行一九九三年九月）
B6判・三〇一頁 一、九五〇円

最近欧米でよく注目され、そして教育や哲学に大きな刺激を与えたのはアメリカの心理学者であり教育学者であったローレンス・コールバーグである。コールバーグの研究は人間が幼児期から「社会化」と呼ばれる過程によつて受け入れられた社会や文化の道德規範をそれぞれの精神的発達段階でいかに扱うかということである。コールバーグは「道德発達」を六段階に分けている。たとえば、小学生は罰と褒美に反応

し、中学生は「みなそうするから私もそうしなければならない」と思い、大人になった大学生と社会人は、社会のルールに従おうとしても、そのルールを理解したうえで自分が判断を下さなければならないというようなことを、各国における調査によつて確認した。コールバーグの研究は啓蒙主義の哲学者が近代的人間の「道德的自律」として要求した生活態度の経験的確認であるといわれる。道德性の発達各段階にに応じてコールバーグは「モラル・ディレンマ」を用いて判断力育成のための道德教育方法も提供したのである。

コールバーグは今まで日本で部分的に研究されてきたが、彼の「道德性発達の哲学」を幅広く根本的に分析し、そして日本の立場から評価したのは本大学文学部佐野教授と吉田教授が若い研究者とともに著した上記の研究書が初めてである。第一部では、「発達理論の教育学的基礎」という題でコールバーグの理論が現代の教育理論や道德教育理論の中で位置づけられ、そしてコールバーグの教育理論の特徴が検討される。第二部「認識発達理論とその哲学的基礎」で

はコールバーグが提出した理論の基本的な構造概念が論述されながらその理論に含まれる三つの問題が論議される。それは第一に、心理学的発達理論が道徳性の発達論でありうるか、すなわち心理学的発達が同時に価値的向上であるか、第二に、道徳的発達が倫理的価値の認知的発達として解釈されるか、第三には、「モラル・ディレンマ」の教育方法が単に判断力育成の手段として用いられるのではなく普遍的な道徳原理を提起することができるのかということである。

キリスト教主義学校同志社にとって最も重要なのは「道徳性発達と宗教」という第三部で紹介されるコールバーグの宗教論である。コールバーグは「なぜ公正であるべきか」とか「なぜ道徳的であるべきか」という問いに対する答えが必要とする「宇宙的パースペクティヴ」は最終的に宗教にしか提出できないと強調している。彼が道徳性発達の第七段階と呼んだ人の宗教性はここにおいて様々な場面から検討されている。コールバーグの神の概念には問題があると思われるとしても、「道徳教育と宗教」

という題で論じられていることは現在の教育の最大の欠陥を指摘しているといえる。内容的に豊富で教育学や哲学の予備知識を持っていない人でも読みやすい本書は日本の教育界に大きな刺激を与えることができると期待される。

クラウス・シュペネマン（大学文学部教授）

石黒昭博著

『近代英語における主語の概念』

（南雲堂・発行一九九三年十月）
（A5判・一八四頁 六、〇〇〇円）

本書は、石黒昭博氏が一九九二年に同志社大学に提出された博士論文を出版されたもので、氏の過去三十年にわたる研究の成果である。その序文で述べられているように、古今東西の二十数名にのぼる文法家の主語論を詳細に検討し、最終的には、氏のオハイオ州立大学留学時代の恩師であるフイルモア博士の格文法に基づいた氏独自の主語論を提案されている。

まず、第一章で、石黒氏は過去二世紀の欧米の近代の言語学者・文法家の主語論の紹介・批判を概括的に行なわれ、近代英語

の主語の概念の研究は、古典的なモデルに基づいたもの、意味と人間の心理に基づいたもの、機能的形式主義に基づいたもの、演繹的形式主義に基づいたもの、意味論的役割と語用論的役割に基づいたものの五つに分類されている。

この後、主要な文法理論における主語の概念の紹介と批判が続く。第二章では格文法、第三章では認知文法、第四章では機能文法、第五章と第六章では記述文法（構造主義文法）と、それぞれの文法理論における主語の概念が要領よく紹介され、批判されていく。

第七章は、主語と論理構造の関係が扱われている。文法的主語と論理的主語や、論理学に基づく主語と述語の関係の記述などが論じられている。石黒氏の結論は、「言語はまさに論理そのものである」という仮説は支持できないというものである。これに続く第八章は、文法と論理学の関係や文法と哲学的範疇の関係などが論じられている。第九章と第十章で、石黒氏は、格文法に基づいた統語論的・意味論的な主語の解釈

を紹介したうえで、氏独自の主語論を展開されている。すなわち、英語では、深層構造では、名詞の階層はなく、動詞の前にはいかなる名詞もこない。話し手が何か発話をしようとする、まず主語になる名詞の選択が始まる。動詞が主語になる名詞を選び、それを文の主語にすると、その名詞が動詞の助けを借りて、その文の構造を決める。

John opened the door

という文を例にとると、その深層構造は、opened John the door the key

である。ここでは名詞の順序は不同である。

John が主語に選ばれると、

John opened the door the key

となり、さらに前置詞が付加されて、

John opened the door with the key

という表層の文ができあがるのである。

主語とは何かという問題は、ギリシア・ローマ時代以来、数知れない学者が取り組みながらも、明快な答えが出されなかった難しい問題であるが、石黒氏は、この難問題に取り組み、古今東西の学者の説を綿密に検討し、氏独自の主語論を提案された。

今後、文語論を研究する者にとって、本書は必読書となるであろう。

中井 悟（大学文学部教授）

北尾謙治・北尾S・キャスリーン著
『観光からビジネスまで』

——トラベル英会話——

（桐原書店・発行一九九三年四月）
（新書判・二二五頁 一、二八〇円）

本書は桐原語学ライブラリーの一書として刊行されたもので、渡航中に出くわすさまざまな場面に実際に使用される用例を提示し、それぞれに日本語訳をほどこして利用者の便宜をはかるために編まれたものである。

著者たちは今までに英語圏・非英語圏三〇数か国以上にわたる旅行経験をもっているため、蓄積された豊富なノウハウが本書では随所に生かされている。使用頻度の高い用例の精選、二〇〇例にもおよび用例の収集、そして具体的場面を想定して細分された状況の設定、どれをとってみても、ちまたに出回っている安直な英会話の類書

とはひと味もふた味も違っている。著者の一人は英語のネイティブスピーカーであり、例文の校閲に三人ものネイティブスピーカーの目を通してのことからもわかるように、英語そのものもきわめてナチュラルである。さらに、学生の海外研修の引率などの機会を通じて、収集した用例が実際の使用にたえるものであるかまで確認する気配りをみせている。このような著者たちの姿勢はすこぶる良心的で、その信頼度には群を抜いているといえるであろう。

内容としては、まず、基礎編で「よく会話で使用される目的別の表現」が、次に、応用編で「状況別による表現と会話」が扱われている。応用編では、実際に渡航する際に最初に経験する「機内」の会話から、現地でのさまざまな生活体験にかかわる会話へと進み、最後に、「帰国」の会話で結んでいる。二五にもおよび状況は、おそらく想像できうるほぼすべてを網羅しているように思われる。また、随所にちりばめられている写真や資料などは見ているだけで楽しいし、ワンポイントアドヴァイスも、英米文化事情を知るうえで役立つものばかり

である。

少し気になったところとしては、実際の会話を模したものととして載せられている短い会話例の中に、暗記例文と重複している場合が若干あること、また、視覚によるインプットだけではなく、聴覚によるインプットも不可欠と思われるに、テープがついていないことぐらいであろうか。とくに、後者については早急な対応を望みたい。

すぐに役立つ情報が満載の本書は、その廉価さとはうらはらに、まさしく「おいし本」である。旅行英語の決定版ともいえる本書の発刊を素直に喜ぶたい。英語の教師であるべくにしても、渡航の際にそつとポケットにしのばせておける新書判サイズであるのが、正直いって、ありがたい。

山内信幸（大学言語文化教育研究センター助教授）

岩村 昌・北村裕明編著

『現代イギリス地方自治の展開』

— サッチャリズムと地方自治の変容 —

（法律文化社・発行一九九三年七月）
A5判・二四九頁 三、六〇五円

初めての試みというものは、ともかく見ていて緊張感とスリルがあつて心地よい。

サッチャリズムの下で、「地方自治の母国」はいかに激しく揺れ動いているのか——この本は、地方行政と地方財政の研究者が知恵を寄せ合つて、その全体像を描いて見せようと言うのである。イギリス地方自治という一つの対象に絞つて、地道に研究会を重ね、周到に全ての問題をカバーして過不足なく全体像を明らかにしようという試みは、私が不勉強のせいかもしれないが、これまであまり見た覚えはない。逆説的ない方だが、たぶん地方行政学と地方財政学という分野が近すぎるせいなのだろう。対象が極めて接近している場合、同じ現象について両者の見方の違いを、異なる専門用語のギャップを埋めながらいちいち詰めてゆかねばならない。曖昧な部分を残すにくだけに、作業は一層きつくなる。イギリスの地方行政財政改革によつて、いま何が起きているのか——それを知りたいのなら、「まずこの本を読んでから」と評者が言いたくなる理由が、ここにある。

また常識と信じていることを引っ繰り返

されてしまう。それも、この本を読む時の知的楽しみである。特に、この本は、人々がイギリスに対して抱く「地方自治の母国」という素朴なイメージを、十分に打ち壊してくれる。まず第一に、これまでの地方行政組織の統合や再編の過程を跡付けつつ、その再編成のあり方は、効率化と地方自治という緊張関係をはらみつゝ、中央の二大政党の利害関係に振り回されてきたことを明らかにしている。しかも、選出議会と行政執行組織が一体化したカウンシルという形態は、イギリス住民自治の原型とされるが、実は、実際に地方政治が政党によつて活性化してくると、中央政党は、地方の非政治化のために、こうした伝統的自治形態の官僚的組織化を図ろうとする。とりわけサッチャーの手による地方行政組織の改革は、労働党系地方当局の抵抗を封じめるための非政治化という性格を持っていたのである。

第二に、サッチャーの改革は、地方分権化が政策意図とされているが、財政改革をはじめとする諸分野において、実は、改革の内容は全く正反対の中央集権化となつて

いることを明らかにしている。そして第三に、サッチャーの改革は、民営化・民間委託・規制緩和などを通じて市場経済部門の拡大を図ることであつたと思われがちだが、その結果を見ると、予想に反して市場経済的領域の拡大をもたらしただけではなく、むしろ公的とも私的とも分類できないグレーゾーン（ボランテニア・非収益的組織・第三セクターなど）が拡大している。そして地方行政と地方財政の研究者である著者達は、ともに、この領域での参加と活性化の方向に、イギリス地方自治の新たな展望を見出そうとしているのである。

ところで今日の日本でも、国際化と地方分権化は社会を解くキーワードとなつている。しかし、どれほどの人々が、実際に国際的に起きている地方分権化政策の実相を知つて、そう言っているのだろうか。はなはだ心もとなひのが現状である。「地方自治の母国」であつた国から、もう一度、日本の地方分権化のあり方を考え直してみたいと思う方には、本書の御一読を是非お勧めしたい。

金子 勝（法政大学経済学部教授）

上野 瞭著

『三軒目のドラキュラ』

（新潮社・発行一九九三年一〇月
B6判・四〇三頁 一、七〇〇円）

この作家はたいそう奇抜な大状況をまず設ける。そうやってフィクション化させておいてそのフレームのなかにさまざまな真実（らしき）と依然として奇抜な小状況とをちりばめ織りなして、読者をそのストーリーに引きこんで離さない不思議な魅力をもつ作品を書いてきた。今回は『砂の上のロビンソン』『住宅会社の宣伝用モデルハウスに住みこんだ家族』や『アリスの穴の中で』（受胎告知を受けた男の数奇な体験）ほどには壮大（？）ではないが、やはり十分意表をつく状況から始まる。ひとつは中年主婦千種恭子への一人暮らし老人からの執拗なラブレター、もうひとつは女子大学入学早々の長女千種千洋の通学電車で脅迫的につきまとう中年男。そしてこの二人の女性を追いつめていく。その転結は対照的である。主婦は老人に対して優位に立ちながら（立つと思ひながら）「悪い」老人の迫力に圧倒される。長女は登校（通学）恐怖にお

ちいる弱者であつたが逆転して中年男を従者のようにしてしまふ。

(一)事件に遭遇した千種一家、夫の慶、長男の中学教師、励たちのファミリー・ヒストリー、(二)脅迫中年男がじつは慶の大学の先輩で会社の上司であり、その家庭、(三)孤獨な老人吉元孝治郎のライフヒストリーとの三者がそれぞれの時代の条件に翻弄されてそこに至り、あるいは現在の今日的な諸問題のなかで生きているのが明らかにされていく。とくに吉元についてはその従弟、軍隊、戦後を克明にたどつて単なる「悪い」老人とはいえない時代と悲しみを背負つた人間が描かれる。以上に一貫した主題は家族であり、老いであり、そして性である。慶は「その時、親と子の気持が重ならない日がくるなどと考えただろうか。衣服を通して感じる肌のぬくもりだけが絶対で、これだけで慶も励も充分だった」。しかしいま「励はおなじ励なのに、まったく違った人間に思えた。成長とは、知っている者が知らない何かに変わるものか」というように、家族がそれぞれ別の世界をもつにいたりながら、なおどのようにして家族た

りうるのかと問う。私はつい最近まで老いは遠いところにあると思っていたのに、吉元老人と千種慶たちの中間の年齢になってしまっていて切実な思いで読んだ。

小説の舞台K市のたたずまいを知っている者には、仮名の地名が推定できて、そういう興味をもつことが許されてもよい。一層親しみを覚えるのである。上野教授の温容に接する機会のある私には作家上野瞭が同一人物であると思うとまた一種その作品に魅かれるのである。次にどんなフレームを設けて、どういう人生を描いてくれるのかと楽しみである。

宮澤正典（女子大学教授）

三沢謙一編

『現代生活と人間』

（晃洋書房・発行一九九三年九月）
A5判・二九〇頁 三、四〇〇円

本書は、編者まえがきに示す通り、「現代日本人の生き方をめぐる問題状況を具体的に明らかにし、そこから今後の展開方向や可能性を探ろうとする」ものである。

はじめに本書の構成を紹介しておこう。

本書は、四部構成、十一章からなり、男性七名、女性四名の研究者・実践家が各一章を担当している。第一部『現代生活と人間』は、総論に当たる部分で、産業化とライフスタイル、脱工業化社会と新しいライフスタイル、戦後日本人の生き方などのテーマ

の歴史的・展望的な考察が試みられている。第二部『多様化する生き方』では、恋愛や結婚への若い世代の対応、職業生活への中高年男性の対応、性別分業への成人女性の対応、そして長寿化への老年世代の対応という四つの局面を中心に、規範的な生き方の喪失、ライフコース・パターンの多様化が著しい現状を取り上げている。第三部『豊かな社会』の「豊かな社会」では、「豊かな社会」のライフスタイルの問題性を、消費行動、余暇行動、階層意識のそれぞれへのその現れに即して、具体的に検討されている。第四部『新しい生き方の形成』は、生き方の変容にかかわる自主的な社会参加活動から、地域生協運動（生活クラブ生協）と宗教活動を選び、それぞれの事例に即して生き方の変容の問題を考究している。

本書を読んで、まず感じるのは、生き方

といえは本来それぞれの選択的・個人的な生、あり、ようと思われがちであるが、戦後日本社会の変動のなかで、私たちの生き方の特徴的な様相（生活態度や人生設計のパターンなど）のなりたちが実にみごとに語られている、ということである。それゆ、読者は、自らの生きてきた時代と社会的なかに身をおいて、よきにつけ悪しきにつけ、社会的存在としての自己を再確認するとも、これからの生き方を反問されている、という思いにかられることになるのである。

本書はこのこれからの生き方という問いにも、ヴァリエティに富んだ執筆陣を配して、さまざまな生き方を示唆してくれている。恋愛と結婚、サラリーマン事情、女性の生き方、エイジレスライフ・死の質を問う時代、余暇などをテーマに、私たちがどのようににそれらに立ち向かうか、を考えさせてくれる。また現に生活クラブ生協の事例を通して、生き方を変える女性の、まさに生き生きとした生の躍動を伝えてくれている。

最後に、本書の全体を通して、いま女性

の生き方、男性の生き方がラジカルに変客しつづけること、あるいは変客をせまられていることを思い知らされる。そして、執筆者の間でも男女の生き方については、微妙な評価のちがいが読みとれることも、読者にとって考えさせられるところである。

なお、生き方の問題に関心を寄せる者にとって、本書はもとより、編者によるもう一冊の『現代人のライフコース』（ミネルヴァ書房）も並読されることをおすすめしておきたい。

渡辺武男（大学文学部教授）

国生 寿著

『生涯学習と公的社会教育―生涯学習の体制づくりと公的社会教育の責務―』

（永田文昌堂刊・一九九二年九月）
（A4判・二三〇頁 二、四〇〇円）

総理府の調査によれば「生涯学習」という言葉の周知度は六四・五％、最近一年間に生涯学習を実践した人は四七・六％、今後、生涯学習をしたいと思う人は六

五・九％で、「国民の生涯学習への関心・意欲が急速に高まっていることがうかがえる」という（一九九二年二月調査）。このような数字にもつき、生涯学習の時代の到来をいう人は多い。

ところで生涯教育（当初は生涯学習という言葉よりも生涯教育という言葉が行政の側でも多く使用されていた）が教育改革構想の理論として論議の対象とされるようになったのは一九六〇年代の半であり、ユネスコの成人教育の責任者であったP・ラングランの提唱を嚆矢としている。以来日本への受容の過程はいささか複雑であるが、その本格的な展開は一九八一年の中央教育審議会の「生涯教育について」の答申あたりからであろう。中曽根内閣の諮問機関である臨時教育審議会（一九八五年六月―一九八七年八月）の「生涯学習体系への移行」の提言を経て中教審の「生涯学習の基盤整備について」の答申にいたって、生涯学習政策は急速な展開をみせる。一九八八年七月一日文部省の機構改革が行われ、夜会教育局を拡充改組して生涯学習局が筆頭局となり、一九九〇年七月には我が国最初の生

涯学習法としての「生涯学習基盤整備法」が制定・施行され、同年八月には同法第一〇条の規定に基づき生涯学習審議会が発足し、一九九三年七月二十九日「今後の社会の動向に対応した生涯学習の振興方策について」答申している。その中で、「当面重点を置いて取り組むべき四つの課題」として①社会人を対象としたリカレント教育の推進について②ボランティア活動の支援・推進について③青少年の学校外活動の充実について④現代的課題に関する学習機会の充実についてを提示し、広く国民の理解を呼びかけている。本書にもふれてあるようにかくて国の政策レベルでは生涯学習政策は急速な展開をみており、それを受けて地方自治体レベルへと浸透しつつあると言える。また先の「基盤整備法」は民間活力の導入をひとつの重要な柱としており文部省と通産省がかかわっているが、厚生省、建設省等の施策が競って展開されている。

このような事態の進行の中で、本書を位置づけてみると、まず時期を得た出版といえる。それはタイトルに集約されている。というのは公的社会教育の役割は生涯学習

政策の中でますます重要となってくるからである。この点については本書の中で存分に展開されている。ただ欲を言えば民間活力の導入等についての反論が必ずしも明確ではない点が物足りない。というのは一九九三年の生涯学習審議会答申のトーンはこの法の線をいささかも崩していないからである。また、「地方分権」論議の中でいわれている「広域行政」論をふまえての「公的」社会教育論の構築が私たちの課題となっているが、この点も是非理論的深化を図ってほしい点である。第二段の理論書の公刊を期待している。

ともあれ、生涯学習時代の到来が言われているいま、本書の一読をすすめたいと思う。

吉富啓一郎（広島女子大学文学部長）

麻田貞雄著

『両大戦間の日米関係―海軍と政策決定過程』

（東京大学出版会・発行一九九三年十二月A5版・三八六頁 七、八二八円）

本書は麻田貞雄・本学法学部教授が一九六五年以来書かれた七つの論文を集めたものである。このように書くといかにも過去に書いた論文をただ一冊の本にしたかのような印象を与えるが、本書はさにあらず、すべての論文を最新の研究を検討した上、必要に応じて、ときには大幅に改訂したものである。

本書は全七章で構成され、第一章「日米関係のなかのマハン」は麻田教授の「海軍史研究の出発点」であるアルフレッド・T・マハンの研究であり、「アメリカ古典文庫」第八巻（一九七七年）の「解説」を大幅に改訂したものである。第二章「ワシントン会議をめぐる政策決定過程の日米比較」はこれも著者の海軍史研究の一端であり、ここではアリソン・モデルの有効性を海軍軍縮で検証しようとしたもので、この会議での日本海軍の決定が日本の対外政策のなかでは例外的な「合理的決定」であるとしている。第三章「旧外交」と《新外交》のはざま」はワシントン会議に対する日本の対応を外交理念や対外認識に焦点を合わせて検討した論文である。第四章「日本海軍と

軍縮」はワシントン会議から失敗に終わったロンドン軍縮会議までの一〇年を「反軍縮派」の動きに焦点をあてた研究で、それに続く第五章「海軍政策の変容と対米開戦への道」はロンドン軍縮会議から日本開戦にいたる日本海軍の政策決定過程の研究で、著者は、海軍の指導者が対米危機のみならず、陸軍との対立および「海軍部内の統制」という対内危機のいずれをも制御できなかったという意味で、この時期を海軍のリーダーシップの崩壊過程である特徴づけている。第六章「人種と文化の相克」は日本人移民問題とそれが持つ日米関係へのインパクトを分析したもので、評者は今でも論文のモデルとして若い研究者に「熟読」をすすめている。最後の第七章「桜の花びらと黄禍の戦慄」は一九六五年初出の論文であり、著者のいう「印象主義的アプローチ」による「アメリカ人の対日イメージ」研究であるが、アメリカ人のみならずわれわれの対米イメージの形成過程やイメージが思考や行動にどのように作用しているかを知る必要性を指摘している。

これらの論文はいずれもそれぞれ独立し

た立派な論文で、改訂されたとはいえ、一〇一〇年も前に書かれた論文という印象を全く感じさせないものばかりである。なかでも各章末にある「注」はまことに詳細で、そのなかにはそれ自体、著者の取り上げた論文テーマの先行研究が適切にレビューされており、若い研究者はまずここを参照することから始めてもらいたいと思う。著者は正統的なアブローチのみならず、斬新な方法論をも視野に入れ、飽くなき資料の渉猟と流麗な文体でそれぞれのテーマに迫っている。著者の学問にかける情熱がひしひしと伝わってくる好著である。今回一冊の本としてまとめられたこともあり、より多くの研究者が著者の業績に触れることができるようになったことを大いに慶びたい。著者が三十数年間「強烈な刺激とインスピレーション」を受けたという入江昭・ハーヴァード大学教授とともに、この本に刺激されて新たに羽ばたく研究者が続くことを期待したい。

細谷正宏（アメリカ研究所教授）

